

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊27年目
創刊1989年 Nr.315

2015年9月号



フェルディナント・ゲオルク・ヴァルトミュラー 「ユリア・コンテッセ・アブラクシン」 1835年
ベルヴェデーレ上宮 Oberes Belvedere 没後150年記念「フェルディナント・ゲオルク・ヴァルトミュラーへのオマージュ」にて2015年10月26日まで展示
Ferdinand Georg Waldmüller, Julia Comtesse Apraxin, 1835 Öl auf Holz 38 x 32 cm © Belvedere, Wien



杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 48



国際原子力機関（IAEA）の技術協力諮問委員会が七月七日（一〇）にかけて、ウィーンのIAEA本部において開催された。IAEAには技術関連部局として、原子力科学・応用局、原子力エネルギー局、原子力安全・セキュリティ局、保障措置局、及び技術協力局の五局があり、各局では外部委員より構成される諮問委員会を設け、各局の活動を検討しその結果を事務局長へ報告している。その中で、技術協力局の役割は、加盟国の持続的な社会・経済的發展を支援するに当たり、原子力技術の安全、平和かつセキュリティを確保した利用を維持・強化する技術サービスを提供することで

ス議長により議事が進められ、提言をとりまとめた。最終日には天野事務局長との懇談があり、諮問委員会による専門的な助言に感謝したい旨のスピーチがあった。我が国は米国に次ぐ多額の資金をIAEAに拠出しており、予算の効果的活用、説明責任の観点から国益を見据えた対応が重要と考え、人材育成を中心に積極的に発言し、それらは提言にも取り入れられた。地元知人やIAEAに務める日本人らと会食したり、植物園や図書館を訪問するなど、会合以外でも収穫があった。

具体的には、教育・訓練等を通じた人材育成、研究開発支援、関連資機材の提供、技術的助言、知識の共有、ネットワーク化などが主な活動内容であり、他の四局の活動と横断的に関連している。

筆者は、一昨年、昨年に引き続きこの委員会に出席した。今回の主な議題は、原子力の平和利用に関する後発開発途上国の課題、原子力人材育成を支援する地域協力の強化、農業及び健康におけるウィルス関連の新しい病気への対応であった。会合はポリビアのトル



さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の図書館について述べてみたい。ウィーンの王宮の一角にある国立図書館は、十八世紀前半、皇帝カール六世の委嘱により、エルラハ父子が設計・建築した。欧州最大のバロック様式の図書館である。その大広間は世界で最も美しい図書館ホールとして知られている。大広間は長さ八〇m、高さ二〇m、中央の丸天井は、宮廷画家ダニエル・グランの華麗なフレスコ画で飾られている。蔵書は約二〇万冊、対トルコ戦争で活躍したプリンツ・オイゲン公の蔵書二万五千冊や宗教改革者マルティン・ルターの膨大な蔵書で知られている。現在は、博物館として一般に公開されている。新しい閲覧室は一九六八年、新王宮の一角に設置され、蔵書約三百万冊がネット利用を含めて公開されている。

一方、京都府が一七七三年に集書院を三条通り沿いに開設した



のが府立図書館の前身といわれている。公立の公開図書館施設としては我が国初である。一八九八年には御苑内に京都府立図書館を開設した。一九〇九年には、現岡崎の地に京都府立京都図書館として蔵書五万冊で開館した。レンガ造三階建、延べ面積七七坪、美術館の機能もあり、竹久夢二や岸田劉生などの作品展が行われた。大正天皇、昭和天皇とも皇太子時代に行啓されている。その後、阪神大震災で建物が深刻な被害を受けたことから、一九九八年に新府立図書館の建築を開始し、マルメディアを最大限に活用した二世紀型の図書館として蔵書約百万冊で二〇〇二年に開館した。古い歴史を持ちつつも、現代の学生や市民のニーズに対応しているのが共通している。余談であるが、筆者はウィーン赴任中、旧国立図書館を二度だけ訪問する機会があった。今回のウィーン出張時には新旧図書館に寄ることができた。京都府立図書館は学生時代には無縁だったが、最近訪問した充実した図書館と感じた。両市の図書館を紹介できた幸運に感謝しつつ、国立図書館大広間の写真を掲載させていたたく。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■